

記載されているところから、他藩に比へると、その歴史は古い。

天野銀左衛門の記録によれば、寛政地変の際、「遠見番所流失」とあるか、恐らく基礎は、そのまま遺って、地変後、その上に再び構築されたか、又は台場施設の附隨と共に修復、改築されたものであろう。何れにしても、同じ基盤の上に何回となく、手が加えられたことは事実である。当該場所は、島原浦の咽喉部に当たり、古代、中世を通して、港に出入する船舶の見張り、監視には格好の場所であった。この遠見番所には、3ヶ所の台場が附隨して、第1台場は、田町海岸供養碑附近、第2台場は、猛島神社旧海浜ホテル附近、第3台場は、長浜明石旅館附近であった。

その一帯は、すっかり変貌して、台場の面影は全くない。金蔵山の番所は、写真の通り、石垣は3段組て、台上に登る通路も、はっきりして、全然破壊されていない。監視の場所は、有明海を真向いにし、東南北か一望に見渡される台上の前面部で、その背後は1段低くなっている。周辺部に基礎石が残っているのは建物の跡と思われる。3間・真ッ角の小舎と思われる、警備員の詰所か、又は各台場への指令所ではなかったか。？

北面の一角が破壊されているか、これは、戦後の頃、大阪某なる者か、埋蔵物発掘のため、掘削した跡とか、その場所以外は整然とした遺構である。全国の遠見番所や台場か、宅地造成や、整地のため、殆んど破壊されて姿を消したか、金蔵山遠見番所は、規模年代においても遠見番所として稀少価値があり、歴史的に意義があるので、その保存取扱いには、細心の配意と配慮を望ましいと思う。

(吉田安弘)

#### 参考図書

日本史 フロイス	9, 10巻	松田 穀一	中央公論社
日本城郭大系	17巻	長崎 編	新人物往来社
新長崎年表	上		長崎文献社
島原半島史	上下	林 銃吉	
華蛮交易明細記			吉川弘文館
噴死の長崎奉行		戸部新十郎	新人物往来社
日本文化とその周辺		国分直一博士記念論文	
築城の歴史			小字館
伊勢神宮文書			田後三頭太夫
寛政地変報告			天野銀左衛門
寛政地変前古地図			{ 八幡神社 蔵 中村貞義 }

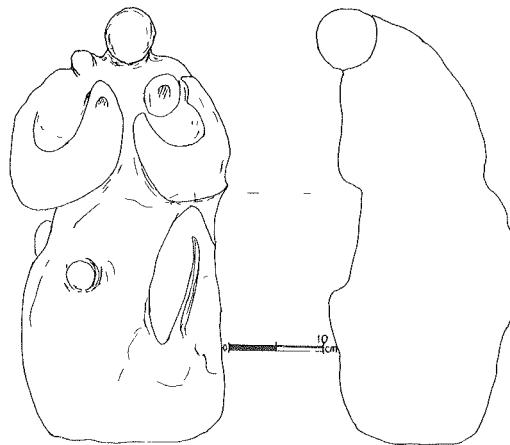
#### 6. 猿石 (島原の浦所在資料の一つとして) 「第8, 第9図」

ここにいう猿石は、韓国全羅北道益山郡金馬面箕陽里弥勒寺や、奈良県明日香村欽明陵附近で掘り出され、いま吉備姫王陵に所在する。従来猿石と呼ばれてきたものの中でも、陽根を持つ猿形石像物との、類似性から呼ぶもので、製作年代の同時性とか、平行文化性から、あえて石像物を呼べはという意味ではない。

島原市の猿石は、島原市片町（旧三会町）の新田潔氏宅地内に祭られていたものを、柚木伸一、吉田安弘の両氏によって注意されたもので、約40年前、宅地造成時出土したものといわれ、寛政地変（寛政4年、1792、眉山の崩壊陥没）にあって埋土したものらしく、石材は島原オニシャクと呼ばれる、新期安山岩で、恐らく江戸前期頃の作と判断され、所在地の立地条件を考えれば大手川の下流川口の附近、即ち今大手浜と呼ばれる地区の、近接したとこかに島原の浦（港）かあったとすれば、まさに港より山に向う入り口に当たる訳で、この類例は、有家町の石像物か旧



第8図 島原猿石写真



第9図 島原猿石実測図

有家港を基点として、高岩山に向う登頂道筋に配置されている例があり<sup>註39</sup>島原の浦の所在を知る資料として注目すべきであろう。

この種のものは、対岸熊本県玉名郡木の葉に（現玉名市内）「木の葉猿」として伝えられており<sup>註40</sup>、郷土玩具としては、和歌山県日吉山王瓦猿がある。雌猿形では、埼玉県北足立郡箕田村三ツ木山王様の石猿があり<sup>註41</sup>、これらの石像は、益山や明日香のものと何ら変わるものではなく、異とするところは製作年代と背景文化の差である。ここでは猿石を論ずるものでないか、東南アジアに発生した生産文化の、伝播文化の一変化形であるか、航海人によって持ちこまれた証として、港を基点として発生した、山岳信仰はここでも生き続け、その側面として語るものは、航海集団と港の関係で、大手浜遺跡も、島原の浦との関連において考えるべき、示唆を与えるにはおかしいものであろう。

#### 註解

38 石材の表面風化と作風を考慮して

39 有家町教育委員会「有家町内における文化財の分布調査」有家町の文化財報告第1集 S. 55-3

40 木彫て江戸期末まで護付として作られていた。一名香の葉猿ともいうという

41 西岡秀雄「性神大成」 1956-11

42 発生の基幹は、海上における己の所在を知ることであったか、高山に神の存在を確信することによって常に神の視界の中にあって、その加護を得る信仰にあった。後には全く農耕生産信仰と結びつい

てしまう。

## 7. まとめ

本調査の概要は、述べたような経過と状況であった。発掘調査地は、原始、原史あるいは中世以前といった、遺跡、遺構、又は包含層といった生活面をみることはできず、（防波堤・遠見番所跡は別として）地層形成時若干の流入物はあったか、遺跡地という現実性とは結びつかないもので、遺物についても略述した。然し問題点かくなかった訳でなく、地学的、防災学的、波浪工学的については、多くの教訓を含み、部分的には以前も指摘したか、今後この地住民の、生活との関わりあいの上で、深く考えなければならない問題である。

特に経済成長という眩惑的語を巧みに利用、土地の投機行為を両策し、更にこれに便乗して、土地造成を計る一部の人々のあることは、その結果かいくなる災害の引き金となるかは、互いの必須認識である。

古代人の知恵と調査結果は、如実にこの自然に対する現実対応と、歴史を、時間的空間をもって教えてくれた。

埋蔵文化財の調査の面では、期待した程の成果は得られなかつたか、この地には、歴史年代は降るとしても中世後半の防波堤、戸期中葉以降の遠見番所という、二つの遺構がある。行政はこの遺構から学ひとるもの、学問的、歴史的位置付け等、何等かの形で後世に伝える処置を、講しられることを期待したい。